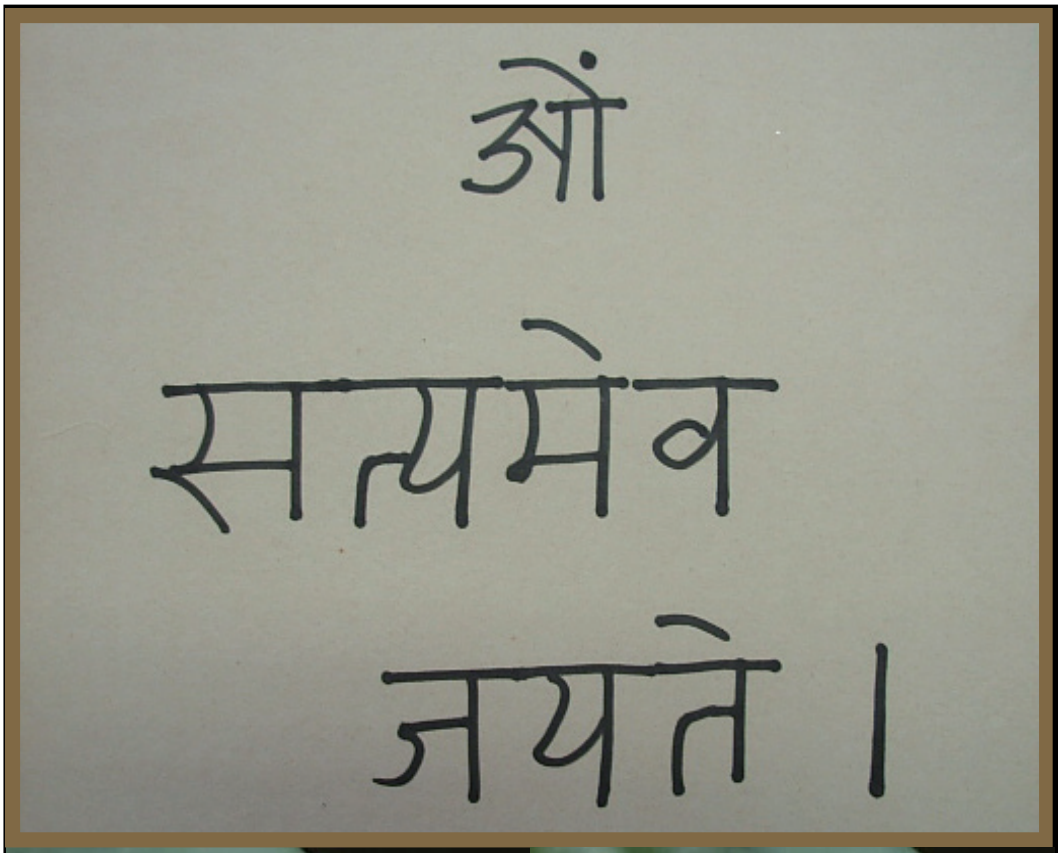
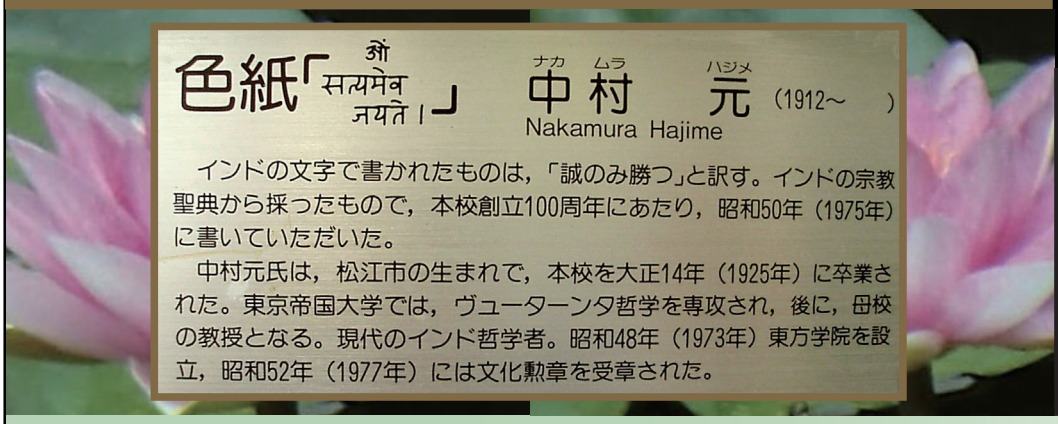




東方だより

平成29年度 後期号（通号 第31号）

（公財）中村元東方研究所／東方学院

〒 101-0021
東京都千代田区外神田 2-17-2
延寿お茶の水ビル 4 階
TEL：03-3251-4081
FAX：03-3251-4082
http://www.toho.or.jp
http://www.toho-gakuin.org

目　次

中村元先生のご遺墨
・前田專學理事長 ……2

平成 29 年度芳名録 ……3

コラム　東方学院　いま・むかし
・有賀弘紀専任研究員 ……3

理事ご紹介
・平岡昇修理事 ……4
・日野紹運理事 ……5

東方学院
・講師のご紹介　宮本久義講師 ……6
　立川武蔵講師 ……6
・研究会員の声　肥沼田鶴子さん ……7
　萩原敏夫さん ……7

研究活動
・研究員の声　服部育郎専任研究員 ……8
　石川 巌 専任研究員 ……8
・研究活動の紹介
　インド石窟美術史のための調査研究
　平岡三保子専任研究員 ……9

行事イベント報告
・中村元東方学術賞・中村元東方学術奨励賞授賞式 他 ……10
・今後の行事ご案内 ……11

新刊紹介 ……4・5・9・11
事務局通信 ……12

中村元先生のご遺墨
―理事長ご挨拶にかえて―

前田専學 理事長

先生は小学校の御三家と呼ばれている名門校の一つ、誠之小学校の卒業生で、文化勲章を受章された先生は、その創立一〇〇周年記念に招待され、記念にと色紙を書くように所望されて些か困惑された姿が目に浮かぶ。先生は書が不得手で、断り切れないときにはお得意のサンスクリット語の文字デーヴァナーガリーでお書きになった。

この時も、色紙の裏のメモから判断すると、「誠は天の道なり。之（これ）を誠にするは人の道なり」（『中庸』二十章）に由来する母校名の「誠」に相当するインド哲学の言葉として、インドの古典『ムンダカ・ウパニシャッド』（Ⅲ・1）にある「サティヤ」（satya 真理・真実）に着目、それを「誠」と訳し、"Om satyam eva jayate"（誠のみが勝つ）とデーヴァナーガリー文字でお記しになっている。

この時先生の脳裏に浮かんだのは、この言葉の対応だけではなく、恐らくインドの国家紋章もあったのではなかろうか。あるいはこの国家紋章の方が先であったかも知れない。

ヒンドゥー教最大の聖地の一つワーラーナシーの近郊にあるサールナート（鹿野苑）の遺跡に隣接する考古博物館には、アショーカ王が紀元前三世紀に、ブッダの初転法輪を記念して建立した石柱の柱頭がある。これは四頭の背中合わせのライオンが頂板に乗り、頂板の側面には四つの方角の守護者である北のライオン、東の象、南の馬、西の雄牛が浮き彫りされ、正面には法輪が彫られている。

国家紋章では、この柱頭の下に、デーヴァナーガリー文字で satyam eva jayate と先生が色紙に書かれたと同じ『ムンダカ・ウパニシャッド』の文言が書かれている。ラーダークリシュナン元大統領は「これはインド国の紋章に刻まれたモットーである」と記している。

柱頭はブッダが四方に、全世界に向かって、その教えを獅子吼している様を表現していると思われる。ブッダが鹿野苑で最初に行った説法の内容は、正確なことは不明ではあるが、仏教の教えである四つの聖なるサティヤ（caturārya-satya 四聖諦）であったと伝えられている。サティヤが重視されるのは仏教においても同様である。日本にあるインド大使館が発行した『インド―前進する民主主義国』（n.d.）によると、「この紋章は世界の平和と安寧に役立とうという古代インド人の意志を継ぐインドの決意を象徴している。力や勇気や確信を象徴しているとされている。

「サティヤ」は、インド最古の聖典『リグ・ヴェーダ』以来、ヒンドゥー教にとって大変に重要な言葉で、「虚偽」が「真実」の反意語として用いられ、神は虚偽を憎むとされている。宇宙の理法に合致するものはすべて真実であり、真理である。それに反するものは虚偽であり、不正である。真実は実現されるものであり、虚偽は実現されないものである。真実によってのみ勝つことが出来る。これがヒンドゥー教徒の古くからの信念である。ガーンディーは「真理の把持」（サティアーグラハ　satya-āgraha）を旗印に非暴力でインドの独立を実現した。

このように見てくると、先生のご遺墨は、誠之小学校にとってまことに相応しい宝物であり、誠之小学校が今後とも先生のような誠の人、真実の人を育成されることを願っている。

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　公益財団法人中村元東方研究所

平成29年度芳名録（五十音順・敬称略）

本年度も多くの皆様にご支援いただきました。心から御礼を申し上げるとともに、ご芳名を記します。

※平成30年1月31日受領分までを掲載しております。

維持会員

史跡足利学校　光明寺（石上和敬）　小笠原勝治　オリオン産業　川﨑信定　川﨑壽子
川崎大師平間寺　来馬明規　黒川文子　克念社　金剛院仏教文化研究所　斎藤敬　西来寺
清水谷圭　下重好正　下田勇人　釈悟震　春秋社　淳心会（日野紹運）　菅原信海　末廣
照純　浅草寺　高﨑宏子　高松孝行　多田孝文　田辺和子　中央学術研究所　千綿道人
角田泰隆　奈良康明　成田山新勝寺　西岡祖秀　日本ヨーガ禅道院　念法眞教　羽矢辰夫
仏教伝道協会　法恩寺（藤原敏文）　法清寺　前田專學　前田式子　松久保秀胤　丸井浩
水野善文　武蔵野大学　高尾山薬王院　吉田宏哲　渡邊信之　渡邊寶陽

賛助会員

秋葉佳伸　阿部敦子　有馬頼底　粟野芳夫　石井勝彦　今西順吉　入江宥道　石上智康
臼井ふじ子　宇杉真　遠藤康　大谷光真　太田正孝　小笠原隆元　岡田真美子　岡田行弘
荻山貴美子　桂紹隆　菅野博史　北村彰宏　黒田大雲　小林和子　小林正和　小林守　小
峰啓誉　小峰立丸　小山典勇　在家仏教協会　斎藤明　佐久間秀範　佐久間留理子
櫻井瑞彦　桜井俊彦　佐藤行教　慈光院（戸田忠）　末木文美士　浄土真宗東本願寺派本
山東本願寺　須佐知行　関戸堯海　千賀正榮　大海修一　田上太秀　武田浩学　竹田軍郁
立花ひろ子　田丸淑子　田原豊道　千葉よし子　鶴谷志磨子　當間哲也　東洋哲学研究所
徳育経営研究所　戸田裕久　鳥山玲　長野市南長野仏教会　中谷信一　中村行明　中村久
夫　中村保志孝　西内之朗　西尾秀生　西川髙史　西宮寛　畠中光享　花岡秀哉　花山多
賀江　濱川香雅里　濱川量子　引田弘道　久富幸子　一島正真　一月正人　平井恭子　福
留順子　藤井教公　藤井知興　藤田宏達　堀江順司　常光寺（堀越教之）　松原光法　松
本知巳　的場裕子　水谷俊一　水谷浩志　三友量順　宮元啓一　森祖道　矢島浩志　山口
泰司　山本文渓　由木義文　好井瑞皖

東方学院後援会

今宮戎神社　大神神社　奥田聖應　加藤公俊　健代和央　古泉圓順　坂本峰徳　総本山四
天王寺　清風学園　瀧藤尊淳　四天王寺大学　塚原昭應　出口隆順　唐招提寺　東大寺
念法眞教　平岡英信　南谷恵敬　宮﨑光映　森田俊朗　森田惇朗　山岡武明　吉田明良

ご寄付

岡村光展　川﨑信定　桒嶋裕司　佃宣昌　念法眞教　前田專學　松久保秀胤　三宅善夫
宮村敏彦　渡邊隆生

●コラム●　東方学院　いま・むかし

中村先生最晩年のご講義に接して

有賀弘紀 専任研究員

現学院長の前田專學先生のお取り計らいで、安居（あんご）から戻り東方研究会に所属することになった私は、早速当時総務でいらした阿部慈園先生から、学院長先生の講義に荷物を持って行ってほしい、まあ「院行（いんなん）」（学院長行者（あんじゃ））とでもいうかな、との一言を頂き、中村元先生に随行し講義を拝聴する機会に恵まれた。平成八年のことである。講義は斯文会館講堂で行われていた。荷物とは、大きな紙袋二つにも及ぶ諸方面からの様々な印刷物であり、その運搬をし、受講の研究会員の方々に展観し、興味があればお持ちいただくのであった。また、講義の円滑な進行を図る役目もあった。講堂の準備や片付け、休憩時間の管理などである。斯文会の担当者にもいろいろご配慮をいただいた。

驚いたのは中村先生の講義であった。二コマの講義のうち、「仏教入門」ではテキストが何と『摂大乗論』。入門と銘打ってはいても、大変難しいテキスト。何年も受講なさっている研究会員も多く、講義の締めくくりの質疑応答では、皆が様々な関心をおもちであることが伝わってきた。

斯文会とのご縁について講演される中村先生

講義に直接関係しない同じような毎回の質問に対しても、悠然と、しかも懇切丁寧に受け答えするお姿に、泰斗という言葉の意味を実感したことが思い出される。

理事ご紹介

理事就任挨拶

平岡昇修 理事

ひらおか　しょうしゅう
昭和 24 年 1 月 15 日生
大谷大学卒、マドラス大学 M．A．
大谷大学博士後期修了
東大寺上之坊住職・東大寺上院院主・東大寺福祉事業団理事長

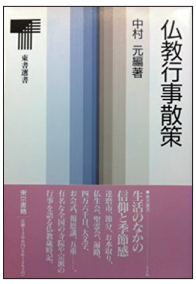
昨年春、理事ならびに関西校主任に就任致しましたのでご挨拶申し上げます。

私が初めて中村元先生にお会いしたのは昭和44年、大谷大学で雲井昭善先生につきインド哲学を学び始めた時分です。当時壷阪寺で開催されていた夏期大学の手伝いで、講師に呼ばれた中村先生を壺阪山駅までお迎えに出向いた私がどれほど緊張していたかはご想像頂けるでしょう。私には月面着陸の初成功と並び、その年の大きな出来事でした。

その後はマドラス大学留学中に同じ下宿で親交を深めた上村勝彦先生からのご紹介があり、中村先生編集の『仏教行事散策』（東京書籍）の共同執筆者に加えて頂きました。昭和63年その編集会議の場で、元号選考に関与しておられた中村先生よりいち早く新年号「平成」を知らされたことを印象深く思い出します。

また大谷大学、花園大学の非常勤講師としてサンスクリット語を教えるうちにトレーニング方式で容易に独習ができるような入門書の出版を思い立ち、『サンスクリット・トレーニングⅠ』（世界聖典刊行協会、平成2年）をはじめとして平成7年にはシリーズ三巻を完成したのですが、その翌年、これらの拙著に対し中村先生が中外日報に書評を寄せて下さったのです。ご逝去される三年前の事です。先生から見ればご不満も多々あったはずですが、それでも「難解なサンスクリット語の懇切な学習ガイドの誕生により東洋文化啓蒙の難所に明るい前途が開けた」という賛辞を頂戴しました。その後サンスクリット独習シリーズの刊行を続ける上で、先生に頂いた励ましの言葉は大きな原動力となりました。

前田專學理事長からのご依頼に対し最初は身に余る重責と悩みましたが、その書評の中村先生のお言葉と寛容な御精神、そしてそれを大切に受け継ぎ守ってこられた前田理事長のお志を思い、理事就任をお受けしました。かつて中村先生が私にして下さったように、後続の方々の研究支援や東洋文化啓蒙活動を広げる機縁となれば幸いに思います。



『仏教行事散策』

『サンスクリット・トレーニング』

新　刊　案　内

前田專學編　『原始仏典Ⅲ　増支部経典　第三巻』

『パーリ語三蔵』の「経蔵」に収められている原始仏教経典、『長部経典』『中部経典』『相応部経典』につづく『増支部経典（アングッタラ・ニカーヤ）』の現代語訳。本巻は第四集（全 27 章）を収録。

単行本：447 頁
出版社：春秋社　言語：日本語
ISBN-10：4393113535
ISBN-13：978-4393113530
発売日：平成 29 年 9 月 30 日
定価：本体 8,000 円（税別）

理事ご紹介

学恩ある中村元先生、前田専學先生

日野紹運 理事

ひの　しょううん
昭和 23 年岐阜県生まれ
名古屋大学文学部卒業
昭和 54 年プーナ大学大学院博士課程修了（PhD）
昭和 56 年名古屋大学大学院博士課程単位取得退学
平成 8 年岐阜薬科大学教授
平成 23 年岐阜薬科大学名誉教授
平成 23 年愛知学院大学文学部教授

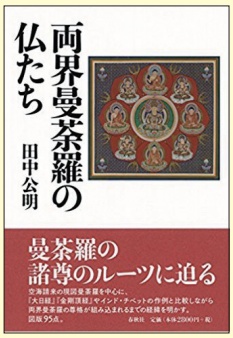
院生になった春に受講したCatuḥsūtrī（『ブラフマスートラ・シャンカラ註解書 1.1.1-1.1.4』）の演習講義がきっかけとなりヴェーダーンタ哲学の研究を志した。翌年修士論文作成の年、前田專學先生が集中講義で来学され『ウパデーシャ・サーハスリー』を講じられた。翻訳は『鈴木学術財団年報』掲載中で、後に公刊される『ヴェーダーンタの哲学』（サーラ叢書）の一部が講義資料になっていた。興奮と感動の授業で、またヴェーダーンタ研究が東京大学で gurusiṣya-parampara の学になっていると実感された。プーナに留学し博士研究する機会を得て、シャンカラの直弟子であるスレーシュヴァラを研究テーマに選んだ。シャンカラが Bhāṣyakāra（註解作者）と言われ、その註解書に評釈するスレーシュヴァラは Vārtikakāra（評釈作者）といわれた。プーナでは guru に出逢えたし、生涯の友人を得ることができた。それは阿部慈園先生で、彼によって東方学院・東方研究会に導びかれた。学位論文を出版した時も中村先生、前田先生に謹呈できるよう労をとってくれた。『ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャッド・［シャンカラ］註解・［スレーシュヴァラ］評釈』研究の出版巻が重なる毎に、中村先生に〝センチュリー・ワークだから〟と激励していただき、「インド人も西洋人もできない仕事を日本人である貴台がなしとげられたということは欣快の至りです」と書いていただけるのがどれほどの喜びと励みになったことでしょう。そして第4巻目が上梓されたところで第7回東方学術賞奨励賞（1991 年）を授与さ、第5巻目以降は中村先生の序文をいただくことができました。

後年この研究は Advaita Tradition Series（不二一元論叢書）全12巻として完結したのですが、前田先生からは身に余るお言葉をいただきました。また、中村先生が「問題の書」と指摘されていたR・Ottoの Westöstliche Mystik を『西と東の神秘主義』（人文書院）として上梓できたことも深い学恩の思いにいたることです。

この度は、公益財団法人中村元東方研究所の理事を仰せつかり身の引き締まる思いですが、学恩に報いるためにも微力を尽くして務めさせていただきます。

『西と東の神秘主義』

新　刊　案　内



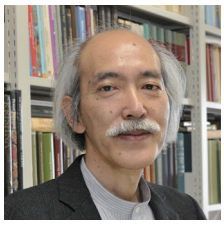
田中公明著　『両界曼荼羅の仏たち』

密教思想を代表する胎蔵・金剛界の両界曼荼羅に描かれる一々の尊格に焦点を当て、空海請来の現図曼荼羅に基づきながら、その成立に至る歴史的経緯・象徴するもの・図像表現を、図表や写真を豊富に用いて明快に紹介。図版 100 点。

単行本：242 頁
出版社：春秋社　言語：日本語
ISBN-10：4393112571
ISBN-13：978-4393112571
発売日：平成 29 年 9 月 30 日
定価：本体 2,800 円（税別）

東方学院　講師ご紹介

宮本久義 講師（東京本校）



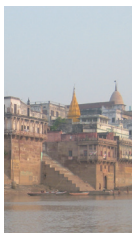
みやもと　ひさよし

昭和 25 年東京生まれ。早稲田大学大学院東洋哲学専攻修士課程修了後、バナーラス・ヒンドゥー大学大学院哲学研究科博士課程に留学。Ph.D.（哲学）。東洋大学文学部教授を経て、現在東洋大学大学院客員教授。

私が初めてインドを訪れたのは一九七一年のことです。船でベンガル湾を横断しマドラス（現チェンナイ）に着いた時は、嬉しさと恐ろしさが交錯する不思議な感覚に捉えられました。インドでの最初の衝撃は、郊外のヒンドゥー教寺院で紙屑拾いの老人にいきなり英語で話しかけられたことです。インド哲学のエッセンスを滔々と説教され、なぜか「これがインドか」としみじみ実感しました。

このような体験もあってインドに七年間留学し、主にヨーガ学派とサーンキヤ学派の思想を学びました。帰国後、東方学院で中村元先生にお目にかかり、温かい励ましのお言葉をいただいた時は本当に感激しました。それからもインドに通い続けましたが、徐々にヒンドゥー教に関心が移り、ヒンドゥー神話や宗教思想、聖地の縁起譚を説くプラーナ聖典を読み、またフィールドワークを重ねております。

インドの人たちは、人間が充実した人生を送るためのさまざまな価値観を生み出し、日本にも多大な影響を与えてきました。いわばいかに生き、いかに死ぬかを考え抜いた達人です。今回、前田專學先生より「ヒンドゥー教の思想と文化」の講師にという有り難いお誘いをいただき、あらためて受講生の皆さんと一緒に、ヒンドゥー教や仏教やジャイナ教を貫くインド人の心性の内奥にまで降りて、彼らが大切に伝えてきたことを考えてみたいと思っております。



立川武蔵 講師（中部校）

たちかわ　むさし

名古屋大学卒、ハーヴァード大学院修了。名古屋大学教授、国立民族学博物館教授を経て、現在、国立民族学博物館名誉教授。Ph.D., 文学博士（名古屋大学）。専攻はインド学・仏教学。著書に『中論の思想』（法蔵館）など。

中部校での『中論』講義は二〇一八年で四年目だ。講義では『中論』を文献学的に読んでいるが、私個人は龍樹の空思想が現代思想として意味を持ちうるのかを考えている。

龍樹およびインドの中観派の思想家たちは外界を事物の実在性を認めなかった。言葉の対象は実際には存在しないが、言葉によってそれらの事物の存在を仮に設定（仮設）している、というのが龍樹の考えであった。彼は仮設された世界の構造を詳しく考察することはしなかったが、その課題は龍樹に次ぐ唯識派に委ねられた。しかし、世親の唯識思想は世界を個人の認識の世界として理解したため、結局は「観念論」の枠にとどまることになった。

古代思想である龍樹や世親の哲学と近現代の思想とを直接的に対峙させることは正しくない。だが、私は、空や唯識の思想から現代が学ぶものは多いと思う。今日では外界世界がどのような意味であるにせよ存在すると考えざるを得ない。「存在」の意味は多様だが、銀河系、化学元素、自然、国家、社会などは個体の「こころ」を離れて（その固体が死亡してもという意味で）存在するのである。

龍樹は、今述べたような外界に関わっていたわけではないが、ともあれ外界の実在性を認めなかった。だが、私は現代の空思想は外界の存在を認めるべきだと思う。現代の空思想の「否定の手」は外的世界の実在性を否定する方向へ延びるのではなくて、人間たちの増大する欲望の制御へと向けられるべきなのである。

東方学院 研究会員の声

肥沼田鶴子さん（東京本校）

私は東方学院前の通りをよく散歩します。四年前のある日、玄関にある「受講の手引き」を手にしたのが始まりです。仏教発祥の地である「インド」に興味を覚えたのは中学生の時です。校舎の窓から見えるカレー店、サリーをまとったご家族の姿、多くのインド人たちが出入りしていたのでいつか必ず味わってみたいと思っていました。その後、インドのカレーと日本のカレーの違いがわかりました。仏教の知識は乏しかったのですが、前田専學先生の「仏教入門」を受講して受講生の真摯な姿勢に驚きと同時に緊が走りました。先生は温厚で凛とした雰囲気は受講生を温かく包み込んで、学問への誘いが深まりました。「原始仏教」「ブッダ」の生涯の教えによって、生き方や考え方等に変化が表われました。

釈悟震先生からは「仏教が歩んだ道」を学びました。大乗仏教の奥深さ、出家者の修業の様子等ていねいなご指導は新鮮でした。揺れ動かされた心はついにインド・スリランカ・ネパールに出向くことになりました。仏教者が聖地に向って山道をゆっくり歩いている姿、人々の信仰心の深さは忘れられません。浅学だった私が、この学院で学べたことに、感謝申し上げます。

萩原敏夫さん（関西校）

退職を機に受講を始め、六年になります。平岡両先生の「美術と経典」では、経典の原典解釈と漢訳比較や東大寺の歴史・行事等、日頃窺い知れないテーマは興味深く楽しいものであり、また、触れる機会の少ないインド・仏教美術や文化の歴史的な姿を数々の貴重な映像資料を通して垣間見ることができる喜びがあります。

また、十数年前に岩波文庫「碧巌録」を買い求めてはみましたものの、歯が立たず断念。いつかそのうちにと思っていましたところ、一昨々年より末木先生の「禅籍講読」が始まり、垂示、著語、評唱を含め一則一則を禅宗史や関連する独特の語彙に触れながら読み進め、捉え難い公案の姿が少しずつ見えてくる過程は嬉しい瞬間です。

殺伐とした報道が溢れ、それらに麻痺しているようにも見える昨今、少しでも多くの方が、東洋思想とりわけ仏教思想や美術に触れる機会を持つことは、単純な作業ではないでしょうが、心の豊かな営みの糧となるのではないかと感じるところです。少人数の講座は私にとって贅沢な時間でもあります。

新ホームページのご案内

東方学院専用ホームページが、平成30年1月1日よりスタートいたしました。

●新アドレス
http://www.toho-gakuin.org/

・お問い合わせページから気軽にお問い合わせもできます。
・休講のお知らせも見られます！

研究員の声

服部育郎 専任研究員
原始仏教に問い、学ぶこと

主に原始仏教の研究をしています。原始仏教とはおよそ仏滅後百年頃までの、古い時代の教えで、ゴータマ・ブッダに近い内容が説かれていると考えられる経典を資料とします。原始仏典などと総称されますが、その文献の扱いにはとても難しいところもあります。つまり、伝承の過程で、時代的、地域的、他宗教との関係などにより、内容が変化発展し、現存する文献には、古い教えとともに後の時代の教えも付加されているからです。そこで、批判的な資料の扱いが必要になります。中村元博士の多くのご研究に導かれ、最近、次の観点から探求しております。

仏教の代表的な思想（教義）とされる「無常」「無我」「空」「慈悲」などが、初期の時代には素朴な形式で説かれていて、それらが一つの確立した「教え」となっていく過程について、つまり、思想史的な観点です。一例をあげれば、いわゆる「煩悩」といいますが、原始仏典の古い部分には、煩悩はかなり素朴な形で、文字通り「煩わし悩ます心のはたらき」として、様々な表現をもって、随所に述べられています。それは、人を悩ますことになる「心の傾向、癖」という観点からとらえることもできます。それが、歴史的にみて、具体的な「煩悩」としてまとめられ、さらには、分類整理され、かなり複雑な「煩悩論」になっていきます。こうした流れをたどることで、現代的な意義も確認できるのではないかと思うのです。古代においても現代においても、四苦八苦は四苦八苦ですし、その根本原因は煩悩だとすると、ますます考察の必要を感じます。

はっとり　いくろう

昭和 36 年三重県生まれ。駒澤大学大学院人文科学研究科博士過程満期退学。プネー大学大学院留学。Ph.D.（プネー大学）。現在、東方学院講師のほか、愛知学院大学非常勤講師、中日文化センター講師。主な著書に『テーラガーター　真の心の安らぎとは何なのか』（NHK 出版）、『インド仏教人物列伝』（大法輪閣）など。

石川巌 専任研究員
今までの私とこれからの私

私はチベットの古代史を研究してきました。つまり歴史学です。歴史学は無文字史料も扱いますが、基本的に地道な文献研究を基盤とします。チベットはチベット語による膨大な宗教文献の伝統がありますし、古代史の史料につきましても、中央アジアの中では比較的恵まれている方です。しかし研究者が少ないこともあってか、文献学上の基盤研究がまだまだ必要とされる状況にあり、関係研究者のなすべきことは多いです。私は、そのような現況のもと古代チベット研究を支え展開しようとする地道な文献学者たちの一員としての私で今もあり続けております。

湘南台のフクロウ喫茶にて

しかし一方、私にとって研究対象としてのチベットは学際的越境的研究への意欲を誘発させる存在でもあります。ユーラシアのど真ん中にあるチベットは、実は文化の交差点でありまして、調べてみれば、ユーラシア中の文化要素の匂いが漂うところなのです。また歴史的な記録よりもむしろ宗教文学などが豊かであるのもチベットです。そこを研究する者は自然に宗教へと目が向かっていきます。魂の欲するところに従った結果、今の私は宗教学や比較神話学の研究の徒にもなってきているのです。

ではこれから私はどうするのか。文献をじっくり吟味する地道な研究も、グローバルな視野から宗教や文化事象の本質的なところを探ることも共に必要とされることです。何かの一事のみを考究するのではなく、私はこの両方の大道を大事にして広範に研究を展開していきたいと考えています。一極集中こそが速やかに着実な成果をもたらしうるかもしれませんが、片側からしか見えないことが両側から見ると分かるということがあるかもしれません。まだあまり何も見えませんが、私の挑戦はこれからだと考えています。

いしかわ　いわお

1998 年、中央大学大学院を満期退学後、中村元東方研究所専任研究員に就任する。2012 年の末から 1 年間、ミュンヘン大学のプロジェクト研究員を務めたが、帰国後復任し研究を続けている。

研究活動の紹介

科学研究費　基盤研究 (B)

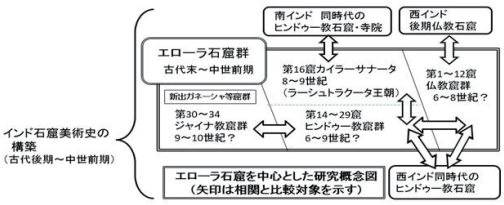
インド石窟美術史のための調査研究

―西インド古代後期～中世前期石窟寺院を中心に―

平岡三保子 専任研究員

名古屋大学院生時代にプーナ（プネー）大学に留学して以来、同じデカン高原西北部に集まる石窟寺院に関心を寄せてきた。石窟寺院は岩山を人為的に穿ち宗教的空間を成すインド特有の建築体系で、石や煉瓦を積み上げた通常建築の場合には最古遺例が五世紀頃なのに対し、石窟の場合はそれ以前の遺例が多数存在する。岩山に内包された石窟は崩壊や破壊行為から免れやすく、岩壁に表された彫刻や壁画も可動性がないため造営当初の状態をよく伝えている。いわば古代の失われた建築を岩山に模刻した第一級の美術史料といえる。時には部分的な改変もなされるが全壊には至らないので、注意深く岩壁の後刻や修正部分を見定め追跡することで編年の手がかりが得られる。そこは石窟研究の本分だ。例えばエローラ第15窟は迫力ある磨崖神像を多数祀ったヒンドゥー教窟だが、上階ヴェランダを外から見上げると列柱の一部に小さく仏像が彫られている（下図）。最初は仏教窟として着手されたが途中でヒンドゥー教窟に改変されたのだ。古代優勢だった仏教が中世に入りヒンドゥー教に凌駕される時代の転換点がここに示されている。文字通り、石窟寺院には連綿と続く歴史が刻み込まれている。私が課題名に慣例のない「石窟美術史」と冠したのは、この視座からインド美術史へのより深い理解が得られると考えるからだ。

学位論文を基に著した『インド仏教石窟寺院の成立と展開』（平成21年、山喜房佛書林）では主に古代初期～後期の仏教石窟発達史を取り上げたが、本科研は古代後期から中世の、ちょうど密教が芽生え成熟する、ダイナミックな変動が造形に現れる時代を射程としている。調査の主対象は上述エローラ石窟群。第16窟カイラーサ寺院は世界文化遺産として名高いが、仏教窟・ヒンドゥー教窟・ジャイナ教窟が併存する、インドでも希有な石窟群という点が重要だ。図表はあくまでも概念図で、年代に「？」マークを付けたように、正確な造営年代の編年も大きな課題だが、古代後期から中世まで仏教～ヒンドゥー教～ジャイナ教と連続的に長期間造営が行われたため、当時の造形活動の流れを体系化する上で恰好の研究素材といえる。そのためエローラ石窟そして関連時代・関連地域の様々な遺跡も含めて現地を訪ね歩き、建築形式、彫刻様式・図像等の資料収集に取り組んできた。五年間の当科研も春から最終年度に入るが、エローラ一カ所だけでも膨大な情報量となり、「石窟美術史」構築の端緒にすら付いていない感がある。近年エローラ石窟に取り組む研究者が増えつつあるが、同時に学説も増え、問題も多様化している。徒に収束を急がず、様式や表現形式からの相対編年や図像の発達・影響関係の検証など、基礎作業や資料集成に努め、さらなる体系的な研究への布石としたい。



エローラ第 15 窟上階ヴェランダ列柱柱頭　触地印仏陀坐像

新　刊　案　内

吉村均著　『空海に学ぶ仏教入門』

空海の教えにこそ、伝統仏教の教義の核心が凝縮されている。弘法大師が説く、苦しみから解放される心のあり方「十住心」に、真の仏教の教えを学ぶ画期的入門書。

新書：237 頁
出版社：筑摩書房　言語：日本語
ISBN-10：4480069968
ISBN-13：978-4480069962
発行日：平成 29 年 10 月 5 日
定価：本体 800 円（税別）

行事イベント報告

平成29年10月10日（火）開催
中村元東方学術賞・中村元東方学術奨励賞授賞式
於 東京・インド大使館

公益財団法人中村元東方研究所の「顕彰事業」の一環として、「第27回中村元東方学術賞授賞式」がインド大使館にて開催されました。

中村元東方学術賞は武蔵野大学教授ケネス・田中先生が授賞され、氏の仏教研究の国際的なアプローチが讃えられました。前田理事長から「中村元東方学術賞」が、大使閣下からインド大使署名入りの英文の「功績証明書」が授与され、三友健容立正大学名誉教授による祝辞も述べられました。最後の謝辞では、ケネス・田中先生が中村元先生の思い出を語る場面も見られました。

前田専學理事長

賞状の授与

残念ながら、今年は若手研究者の奨励を目的として創設された「第3回中村元東方学術奨励賞授賞式」は該当者がなしという結果となりました。

授賞式、ならびに式典終了後に開かれました祝賀会には総勢100名以上の出席者があり、会場がせまく感じられる程でした。平成29年度の「顕彰事業」は盛会裡に円了することが出来ました。

インド大使

三友健容名誉教授

平成29年12月2日（土）開催
東方学院・酬仏恩講合同講演会
於 奈良・薬師寺

奈良法相宗大本山薬師寺「まほろば会館」にて、第18回東方学院・酬仏恩講合同講演会講演会が行われました。本年は42名の参加がありました。まず丸井浩事務局長代読による前田専學学院長よりの開会挨拶に始まり、加藤隆宏氏（中部大学准教授）より「現代インドの仏教徒について―ある家族との交流から」のテーマでの帰朝報告が行われました。これは当法人の「研究調査事業」の一環である「アジア諸国海外派遣・調査助成金」によりインドに派遣され、その研究成果を報告したものです。

続いて熊本崇城大学芸術学部教授である楠元香代子先生によるご講演「奈良時代の菩薩形の装身宝飾具について ―薬師寺薬師三尊菩薩像宝冠装飾ガラス嵌入について」が行われ、薬師寺松久保秀胤長藹による閉会の挨拶を以て、本年も恙なく終了となりました。

薬師三尊像【国宝】

酬仏恩講講演会

左：月光菩薩・右：日光菩薩

【今後の行事ご案内】

★東方学院関西校普及事業
聴く・観る・学ぶ　東大寺修二会（お水取り）
平成30年3月7日(水) 開催予定
時間　15時～19時30分
会場　東大寺総合文化センター・小ホール
（開場14時30分）
講座　「お水取りと観音菩薩」（15時～16時）
講師　文学博士　平岡三保子
拝観　二月堂・修二会行法とお松明（16時～19時30分）
定員　100名
※事前申込み制ではありませんので、直接当日会場にお越しください。
参加費：2000円

東大寺二月堂　修二会

★佛教文化講演会
平成30年5月18日(金) 開催予定
会場　法恩寺（香川県高松市）
※詳細は決まり次第、ホームページ等でお知らせ申し上げます。

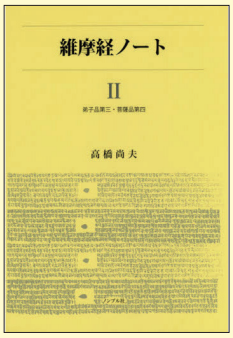
法恩寺

★2018年度　東方学院ガイダンスのご案内
参加無料のガイダンス会場では当学院の特徴や講師による講義の説明などがございます。講師と直接お話し相談する事もできます。新規受講の方だけではなく、継続受講の方もふるってご参加ください。

皆さまのご参加を心よりお待ちしております。
東京本校：4月9日（月）
18時～
於　ホテル東京ガーデンパレス
関西校：4月5日（木）
18時～
於　法華クラブ
中部校：4月7日（土）
18時30分～
於　ホテル名古屋ガーデンパレス
※詳細は受講票とともにお送りするご案内に記載しております。

ガイダンス風景

新　刊　案　内



高橋尚夫著　『維摩経ノート II　弟子品第三・菩薩品第四』

古今東西の仏教者にくり返し愛読されてきた『維摩経』の完全版！【第２巻】第三章 声聞と菩薩を病気見舞いに遣わす（弟子品第三・菩薩品第四）仏陀が十大弟子と菩薩たちに維摩の病床を見舞うように頼むものの、みな過去にやり込められたことを語って断ってしまいます。いったい維摩は、弟子たちに何を語ったのでしょうか……。有名な「無尽灯」の段を収録

単行本：340 頁
出版社：ノンブル社　言語：日本語
ISBN-10：4866440090
ISBN-13：978-4866440095
発売日：平成 29 年 12 月 18 日
定価：本体 6,000 円（税別）

事務局通信

【東方学院専用ホームページのお知らせ】
平成 30 年 1 月 1 日より、スマートフォンにも対応している東方学院専用ホームページ http://toho-gakuin.org を公開しております。講師・講義の紹介や学院からのお知らせなどをご確認頂けます。ぜひご活用ください。

【編集部より】 東方だよりは、読者の皆様からのご意見・ご要望をいただき、よりよい誌面にしていく所存です。また、ご寄稿もお待ち申し上げております。尚、ご連絡は手紙（宛名面に「東方だより編集部宛」とご記入願います）にて承っております。

当研究所の活動にご賛同下さる皆様へお願い

公益財団法人中村元東方研究所は、創立者中村元の理想を実現するため活動する非営利の文化事業財団であり、その運営はご理解ご協力いただける皆様からのご寄付により成り立っています。当研究所では各種会員を設定して、活動趣旨にご賛同いただける皆さまの積極的なご支援をお願いしております。

(1) 一般寄付
一般寄付は会費と異なり、金額や期限等を設定せずに、随時受け付けさせていただいております。お寄せいただいた寄付金は、当法人が 取り組んでいるさまざまな活動に広く活用させていただきます。

(2) 継続ご支援（維持会員・賛助会員）
当法人の活動に賛同し、継続的に支援してくださる会員も随時募集しています。
・維持会費：一口　年　50,000 円
・賛助会費：一口　年　10,000 円
※上記いずれかをお選びいただき、出来れば複数口でご支援賜れば幸いです。

(3) 普通会員：年会費　7,000 円
普通会員にも、維持・賛助両会員と同じく、定期刊行物『東方』の他、催し物、会合等のご案内をお送りいたしますが、年会費に税の優遇措置は適用されません。

【所得税の免税について】
当法人は内閣府の認定を受け、平成 24 年 7 月 2 日をもって、従来の財団法人から「公益財団法人」へと移行いたしました。公益財団法人へ移行したことに伴い、上記 (1)、(2) の一般ご寄付及び維持会・賛助会の会費は、下記の通り税制上の優遇措置が受けられます。

※所得控除・・・所得控除は、所得金額に対して寄付金額の大きい場合に減税効果が大きくなります。「その年の寄付金額－ 2,000 円」が課税される所得金額から控除されます。控除できる寄付金額はその年の総所得金額等の 40％相当額が限度となっております。

公式ホームページのご案内

東方研究所及び東方学院の公式ホームページでは、さまざまな情報が随時更新されております。是非ご覧下さい。

ホームページ URL : http://www.toho.or.jp

中村元東方研究所　検索

▶当研究所の目的・理念・あゆみ
▶中村元博士の略歴・著作文献目録
▶東方学院（開講科目、講師紹介、著書紹介）
▶専任研究員紹介、書籍案内
▶公開講座、イベントのお知らせや開催レポートなど

東方学院専用ホームページ URL : http://www.toho-gakuin.org
（スマートフォン対応）

東方学院　検索

▶東方学院の開講科目や講師の紹介、開講日などをご案内しております。

東方だより　平成 29 年度後期号　（通号第 31 号）　平成 30 年 2 月 19 日発行
【編集 / 発行】公益財団法人中村元東方研究所　本部事務局（東京）　編集責任者：釈悟震
〒 101-0021　東京都千代田区外神田 2-17-2 延寿お茶の水ビル 4 階　TEL : 03-3251-4081　FAX : 03-3251-4082